

学科 ライフスタイル	氏名 今泉充啓			
<p>家政学部の教育目標は、本学の教育目標と教育方針の下、「真心・努力・奉仕・感謝」の四大精神の実践を通して社会的に自立して生きていく上で必要な①スキル・リテラシー・教養等に関する一般的知識・技能と②家政に関する専門的知識・技能と③建学の精神・社会人基礎力・pisa型学力を統合的に身に付け、社会に出てからは、これらの知識・技能をベースに生涯学習社会の中で自己の潜在能力をさらに開発しながら、職場と地域の課題解決に貢献できる人材を育成することである。</p> <p>ライフスタイル学科の教育目標は、家政学部の教育目標の下、これからの社会の新しいライフスタイルのデザインを提案することによって、人々の日常生活を衣・食・住の面から支援することのできる人材を育成することである。</p>				
1 教育の責任				
<p>2025年度は、オムニバス科目を含む計12科目を担当した。「情報リテラシーⅠ・Ⅱ」、「数理・データサイエンス・AIリテラシー」は社会的に自立して生きていく上で必要なスキル・リテラシー・教養等を学修する基礎科目である。「ライフスタイル学演習Ⅱ」はライフスタイル「学科基礎基幹科目群」の専門科目であり、生活に関する基本的視座を涵養することを目指している。「マーケティング」は「ビジネス・地域分野」の専門科目であり、地域の問題を収集、分析、整理して課題解決を提案するために必要な知識・技能を学修する科目である。授業以外では、安城学園見学会の体験講座(添付資料1)の講師、3年生の担任、また校務として情報教育委員長および生成AI利活用推進プロジェクトリーダーを務めた。</p>				
科目名	学科	開講期	受講者数	備考
情報リテラシーⅠ	ライフスタイル	1年前期	33	
情報リテラシーⅡ	ライフスタイル	1年後期	38	
数理・データサイエンス・AIリテラシー	ライフスタイル	1年前期	37	オムニバス
ライフスタイル学演習Ⅱ	ライフスタイル	1年後期	2	
マーケティング	ライフスタイル	2年前期	31	
キャリアデザイン講座	ライフスタイル	3年後期	43	
スタジオC(地域活性)	ライフスタイル	3年通年	7	
卒業研究		4年通年	5	
他4科目				
2 教育の理念と目的				
<p>現代は変化の激しい時代である。不確実性が高まり、将来の予測が困難な社会においては、pisa型学力がこれまで以上に重要である。すなわち、現代社会を生き抜くためには、課題解決に必要な知識や情報を主体的に獲得し、それらを適切に活用しながら実際の課題解決へと結び付ける問題解決型の学力を身に付けることが不可欠である。このような時代において、教育の役割は、学生が正解のない問題に対して主体的に考え、多様な視点を踏まえながら最適な解を導き出せる力を育むことであると考え。そのために、学生が新たな気づきや発見を得られるような</p>				

学修機会を意図的に設計し、思考を深める支援を行っていききたい。さらに、社会の情報化が進展する中で、多様な人々と協働しながら新たな価値を創出し、課題解決へとつなげていく力も不可欠である。社会人基礎力はその基盤となるものであり、教育を通じてこれらの力をバランスよく育成することを目指したい。

3 教育方法

ICT を活用して授業を実施している。事前にパワーポイント形式のスライド資料（添付資料 2）を配布し、学生があらかじめ学修内容を把握できるようにしている。さらに、Web 上の Classroom で予習課題を提示し、テキストや参考資料を活用しながら学修を進めるよう促している。加えて、学生には NotebookLM 活用マニュアルを配布し、講義資料を NotebookLM に登録するよう指示している。これらの取り組みは、予習・復習の機会を提供するとともに、授業内容の理解を深めるための基盤となっている。授業では、随時質問を投げかけることで学生の思考を促し、主体的な参加を促進している。また、学修内容の理解を深め、その応用・活用ができるよう、必要に応じて演習課題を課している。授業後には、NotebookLM を活用して授業内容を解説する動画コンテンツを作成し、復習教材として提供している。さらに、Classroom 上で復習課題を配信し、授業で扱った基本事項を再確認できるようにしている。具体的には、授業内容の主要なポイントを整理した問題を提示することで復習の機会を設け、学修内容の定着を図っている。毎回、学生の回答を確認して理解度を客観的に把握し、理解が不十分な内容については次回の授業で補足説明を行っている。

4 授業改善の活動

学期末に実施する授業アンケートを活用し、授業改善に取り組んでいる。アンケートの集計結果をもとにリフレクションペーパー（授業改善計画書）（添付資料 3）を作成し、今後の改善策を検討している。また、FD 研修会に参加し、他の教員の実践報告を通じて授業展開や指導法を学び、教育の質向上に向けた研鑽を積んでいる。2025 年度には、「授業における NotebookLM の活用事例・実践例の紹介」等をテーマとした FD・情報教育研修会を 3 回主催し、企画・運営に携わった。さらに、毎年、国内外で開催される数理・確率モデルの解析に関する学会に参加し、研究発表を行っている。これらの学会活動を通じて得た最新の専門的知見を教育に還元し、授業内容の充実と学びの深化に努めている。

5 学生の授業評価

担当科目において授業アンケートを実施している。昨年度の同一科目と比較すると、総合満足度は向上しており、授業全体として一定の改善が図られていることが確認された（添付資料 4）。特に、「理解の確認」や「学生の意欲」に関する項目では概ね良好な評価を得ており、授業中に机間指導を行いながら学生の理解度を把握するなど、きめ細かな対応が評価につながっていると考えられる。また、自由記述においても「授業が楽しかった」といった意見が見られ、学生の興味・関心を引き出す授業運営が一定の成果を上げていることが示された。今後は、授業内容や進行方法のさらなる工夫により、学生の理解を一層深めるとともに、興味・関心を高める授業設計を行い、学修意欲の向上と学修成果の定着を図ることで、授業の質のさらなる向上を目指したい。

6 学生の学修成果

情報技術に関する基礎知識およびリテラシーの育成に継続的に取り組んだ結果、学生の学修成果には着実な向上が見られた。さらに、基礎操作から応用的活用へと段階的に指導を行ったことで、学生は修得した技能を実践的に活用する力を身に付けている。収集した情報を整理し、論理的に構成されたスライドとしてまとめるとともに、要点を明確に伝える表現力の向上も確認された。特に、情報の取捨選択や図表の効果的な活用に改善が見られ、情報整理力および発信力の定着が認められた。加えて、学生が自ら関心のあるテーマに基づいてデータを収集し、その背景を考察するなど、主体的に学びに取り組む姿勢の育成にもつながっている（添付資料 5）。

7 授業科目に関連した教材開発

科目内容をまとめた資料（添付資料 6）、パワーポイントのスライド、および演習問題等を配布している。資料には図やグラフを取り入れ、内容の理解が深まるよう工夫している。また、具体的な応用例を取り上げることで、実践的な学びへとつなげている。

8 指導力向上のための取り組み

情報教育委員長として、FD・情報教育研修会の企画・運営を行った。2025年6月に開催した「NotebookLM等の生成AIの活用について」をテーマとした研修会では講師を務めた（添付資料7）。また、2025年度後期にはNotebookLMの活用に関するパイロット授業の担当者となり、2026年2月に開催した「授業におけるNotebookLMの活用事例・実践例の紹介」をテーマとした研修会において報告を行った（添付資料8）。

9 今後の目標

今後は、学生の基礎学力向上を目的とした教育研究の一環として、生成AIをはじめとするAI技術を活用した指導方法に一層注目していきたい。近年、生成AI技術は急速に進展し、学修支援、情報整理、文章作成、データ分析など、教育の多様な場面で活用可能となっている。一方で、AIを単に導入するだけでは基礎学力の向上に直結するとは限らず、思考の代替にとどまる危険性も指摘されている。そのため、AIの利用自体を目的化するのではなく、AIを活用しながら学生の思考力・判断力・表現力を高める教育方法の構築が重要である。AIを活用するにあたっては、最新の技術動向や各種サービスの特性を継続的に把握し、教育現場に適切に応用していくことが不可欠である。現在、多様な生成AIが存在しており、それぞれの機能や特性を踏まえた活用方法について検討を進めたい。例えば、資料の要点整理には要約機能を、論理構造の確認には対話型の質問応答を、データ分析にはAIによる補助的解説を活用するなど、学修段階や課題の性質に応じた指導法の整理が求められる。さらに、生成AIの活用にはプライバシーやセキュリティといったリスクも伴うため、倫理的側面やリスク管理に関する教育も不可欠である。情報の適切な取り扱いや出力内容の検証を含め、安全かつ責任あるAI活用を指導していく必要がある。一方で、学生自身が生成AIを主体的に活用する力を身に付けることも重要である。生成AIを活用した自主学習を通じて、基礎学力の向上が期待される。例えば、授業で配布された資料をもとにAIを用いて要点を整理し、予習・復習に活かすことや、リサーチや分析の補助、課題解決に向けたアイデア創出、さらには学修計画の立案や進捗管理など、多様な活用方法が考えられる。今後は、このようなAIを活用した学修方法の有効性を検証しながら、学生の主体的な学びを促進する教育手法について、さらに検討を進めていきたい。

10 添付資料

添付資料1「2026年3月安城学園見学会資料」、添付資料2「講義資料1」、
添付資料3「リフレクションペーパー」、添付資料4「授業アンケート」、
添付資料5「講義資料2」、添付資料6「講義資料3」、
添付資料7「研修会資料1」、添付資料8「研修会資料2」